



2026 年 9 月 1 日 発行
(通巻 510 号) 定価 100 円

現代座レポート No. 107

- ・これからの活動予定 (1)
- ・「遠い空の下のご郷」東京学芸大・原子栄一郎 (2)
- ・「遠い空の下のご郷」東京学芸大・学生たち (3)
- ・ガザ支援「不屈の船団」参加報告 武本匡弘 (4~5)
- ・3階小ホールの幕が新しくなりました (6)
- ・緑町ふれあいサロン・「双子の星」公演 (7)
- ・木村快の近況・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

これからの活動予定

●「武蔵野の歌が聞こえる」

最初は出演者の多い「合唱構成劇」としてスタートした「武蔵野の歌が聞こえる」は、昨年までに出演者 4 人とピアニストによる、1 時間 10 分の「語り芝居」として生まれ変わりました。昨年 12 月の現代座 3 F 小ホール公演を見てくださった方たちから「是非子どもたちに見てほしい」という声があがっていましたが、それが実現することになりました。

小金井市の緑中学校で PTA 行事として公演する事が決まったのです。来年 1 月 17 日(日)に緑中学校の体育館で、希望する中学生とご家族に見ていただきます。どこにでも出かけて行って気楽に見てもらえる物にしたいと思っていますので、本当にうれしいです。「武蔵野の歌が聞こえる」は小金井を含む武蔵野台地を江戸時代に開拓し村を作った「川崎平右衛門」のお話です。子供たちに地域の歴史に興味を持ってもらう入り口になればと思います。

●「遠い空の下のご郷」ハンセン病療養所に生きて」

ハンセン病療養所で暮らす人たちと出会ったことから生まれた語りです。辛く苦しい現実の中でも明るく人間らしく生きた 2 人の女性の人生を語ります。

昨年からの活動を再開しました。お寺で修行僧の人権学習として呼んでいただいたり、東京学芸大学では昨年も今年も授業で取り上げていただきました。(2 ページ参照) 会員の方から「聞きたい」と言っていたのをきっかけに、久しぶりに現代座での公演をすることにしました。12 月 6 日(日)午後 2 時から、現代座 3 F 小ホールで行います。

●「力の支配に屈しない」

ガザ支援「不屈の船団」参加報告
これは、プロダイバーで環境活動家の武本匡弘さんの講演会です。

「NPO 気候危機対策ネットワーク」代表の武本さんは、パレスチナ・ガザへ支援物資を積んで人道支援活動を行っている国際 NGO 「不屈の船団」に、今年唯一の日本人として参加しました。その体験の報告会を 7 月に現代座ホールで開き、この「現代座レポート」にも書いていただきました。(4、5 ページ)

もっと多くの方に知ってもらいたいと、再度講演会を企画しました。

12 月 20 日(日)午後 3 時から 現代座 3 F 小ホールです。

「遠い空の下のご郷

～ハンセン病療養所に生きて」

語り：木下美智子 演奏：矢川千尋

12 月 6 日(日)午後 2 時～4 時 現代座 3 F 小ホール

参加費：2000 円 40 人予約制

「力の支配に屈しない」

ガザ支援「不屈の船団」参加報告

講師：武本匡弘

12 月 20 日(日)午後 3 時～5 時 現代座 3 F 小ホール

参加費：1000 円 40 人予約制

予約・問い合わせ

TEL 042-381-5165 FAX 042-381-6987

MAIL: gendaiza.ticket@gmail.com

「遠い空の下の故郷」

〜ハンセン病療養所に生きて〜

7月9日（木）東京学芸大学の教室で、教員養成課程で環境教育を学ぶ2年生に、ハンセン病療養所で暮らす2人の女性の人生を語る「遠い空の下の故郷」を聞いていただきました。

2001年に熊本で「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の勝利判決がでた時、取材で阿部智子さんと山口トキさんに出逢いました。その後も交流を続け、聞かせていただいた貴重なお話を、一人でも多くの方に知っていただきたと「語り」にしました。授業で取り上げて下さった原子さんに、「環境教育」について書いていただきました。



2001年・阿部智子さん

2008年・山口トキさんと
木下美智子

私がやっていること

原子栄一郎



私は大学で環境教育を専攻する学生たちと共に、30年にわたって「環境教育」を学び探索する取り組みを行ってきました。

「環境教育」とは、地球環境の現状や問題点を学び、持続可能な社会を実現するための知識・技能・態度・行動力を身につける教育活動という側面もありますが、私にとって「環境教育」を学び探索するとは、「環境教育とは何か？」を一人一人が問い考え続けて、「人間であること」を十全に表現し、共に「人間として生きること」の方に向けて実際に今、ここで、この関わり（環境）の中で生き、「新しい人」に共になることです。私も若者たちと一緒に「環境教育」を学び探索します。

このような取り組みをする上で大切にしていることは、『この私』を棚上げにしないこと、そして、『この私』を振り返り吟味することです。

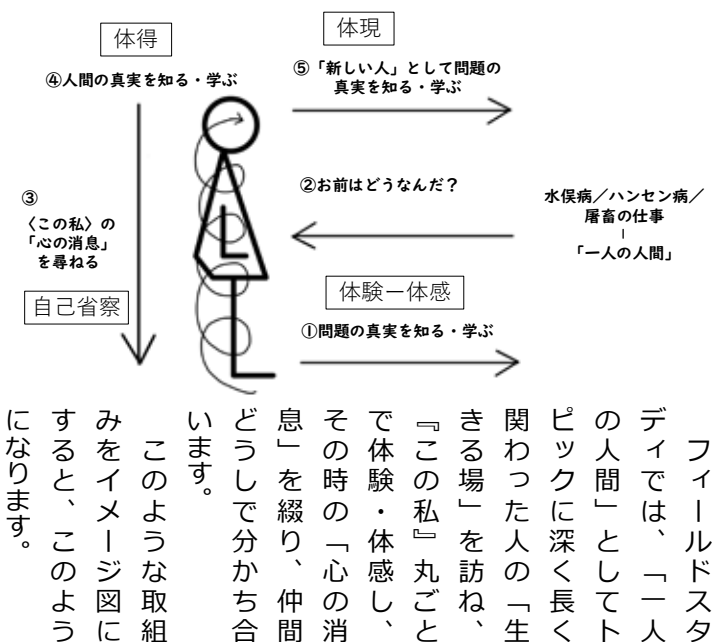
実際の大学での取り組みでは、座学とフィールドスタディを組み合わせています。

座学では、『この私』を振り返り吟味する「鏡」として水俣病、ハンセン病、屠畜の仕事などを取り上げます。

「鏡」について、水俣病の医学的調査研究の先駆者であり、患者に寄り添い続けられた原田正純さんはこのように述べておられます。

水俣病は鏡である。この鏡は、みる人によって深くも、浅くも、平板にも立体的にもみえる。そこに、社会のしくみや政治のありよう、そして、みずからの生きざままで、あらゆるものが残酷なまでに映しだされてしまう。そのことは、はじめての人たちにとっては強烈な衝撃となり、忘れ得ないものとなる。（『水俣病が映す世界』、1989年、日本評論社、3頁）。

私の座学では、具体的には様々な立場から「一人の人間」としてこれらのトピックに深く長く関わった人を取り上げ、その人に関する資料を読んだり映像をみたり、ご本人に来ていただいております。伺ったたりして、同じく「一人の人間」である『この私』が感じ、思い、考えたことなど「心の消息」を綴り、仲間どうしで分かち合います。



環境教育専攻2年生の必修科目の最後に、昨年引き続いて、現代座の木下美智子さん、矢川千尋さん、八木浩司さんにお越しいただいて、「うたと語り 遠い空の下」の故郷…ハンセン病療養所に生きて」をご公演いただきました。学生たちはどのように体験し体感したでしょうか。その「心の消息」をお読みいただけると幸いです。（原子栄一郎）

学生さんたちの「心の消息」

● 今回、「うたと語り 遠い空の下」の故郷…ハンセン病療養所に生きて」を鑑賞し、ハンセン病そのものだけではなく、国の政策によって多くの人の人生が大きく変えられてしまったことを改めて実感した。病気に苦しむだけではなく、隔離や差別によって家族や故郷から引き離され、自分の人生を自由に選ぶことができなかった現実を知り、とても胸が苦しくなった。

これまでの授業では、ハンセン病や水俣病について学び、国立ハンセン病資料館にも足を運んだ。資料館では、当時の生活の様子や隔離政策の実態を展示を通して知り、差別や偏見が人の人生を大きく左右してしまうことを学んだ。しかし、今回の講演では、実際にその時代を生きてきた方々の言葉で語られたことで、資料や映像だけでは感じ取れなかった思いや苦しさ、人としての強さをより身近に感じることができた。また、水俣病について学んだ際にも、病気だけでなく偏見や差別によって苦しめられた人が多くいたことを知ったが、ハンセン病にも共通する問題があり、病気に以上社会の在り方が人々を苦しめてきたことを改めて

て考えさせられた。

● まず、導入で「故郷」を全員で歌ったことが印象的だった。なぜ「故郷」なのだろうと疑問に思ったが、語りを聞いている中で、ハンセン病患者たちは故郷に戻りたくても戻れない、だけど故郷を愛している、という心の表れなのだと感じた。実際、私自身歌っているときに地元を思い出して帰りたいなと感じた。また、ハンセン病患者さんたちに取材に行ったときのお話で、「ハンセン病患者さんたちは自分たちが出した食べ物を食べてくれるか気にしている」という言葉が心に残った。実際に今もハンセン病についての理解が進んでいるにもかかわらず、実際に目の前に患者さんたちの出した食べ物が出されると手を付けられない人がいるということを知り驚いた。そんなにも差別や偏見が人の心の底に根付いているのだと衝撃を受けた。

● 今回、現代座の方々の歌と語りを鑑賞し、ハンセン病患者の方々の実体験がリアルに入ってきた。（中略）らい予防法が廃止され、国も謝罪したからといってすべて解決するわけではなく、正しい知識を持たない人の根底にある差別意識が元患者の方々を苦しめていたことが分かった。これは今でも解決しているとはいえず、ハンセン病に対して正しい知識を持っていない人も多いことに加え、コロナウイルスが流行したときもハンセン病の時に似た差別が起こっていた。人間である以上、差別意識があることは防げないのかもしれないがそれを理解したうえで、その意識を理性でキャンセルすることが重要なかもしれないと思った。

● 初めて現代座の公演をお聞きして、自分は特に語り部の方の感情を込めた迫力のあるお話の仕方に心を打たれた。一つめのお話も二つ目のお話も、その実際のエピソードも相まって聞いていて苦しくなるほどのものだった。ただ、聞きながらこのような気持ちになることがまず自分事として考えられている証拠なのかなとも思った。どちらの話も親の家族愛がすごく伝わった。子供のころから人目を気にして差別や偏見から逃げながらも、そんなわが子を氣遣って最大限サポートをする親とそのサポートに愛を感じながらも申し訳なさを感じて自ら療養所へ行く覚悟を決める場面はとてむぐつときた。



学生さんたちと記念撮影

前列左から2人目・矢川千尋（演奏）木下美智子（語り）右端・原子さん

「力の支配に屈しない」 ガザ支援「不屈の船団」参加報告

武本匡弘

7月18日（土）現代座ホールで武本匡弘さんの講演会が行われました。お話の内容を寄稿していただきました。



プロダイバー
環境活動家
NPO気候危機対策
ネットワーク代表

私は、プロダイバーとして40数年国内外様々な海で潜ってきました。最初の20年ほどは良かったものの、この20年ほどは地球温暖化による海水温の上昇等で海洋環境の変容は激烈です。正に地球全体が「ただならぬ状況」になっているという事を体感しています。

これらは私たちの行き過ぎた経済活動等が原因であるのはもちろんの事、何より一瞬にして大量に環境を破壊し続ける軍事行動・戦争行為にもきちんと目を向ける必要があるのです。

私は現在の活動の中心である気候危機に立ち向かう行動と共に「気候危機と平和の危機」の交差性に多くの人に気づいて欲しいと考え、様々な市民活動との連携を行っています。

不屈の船団

さて、2025年6月環境活動家グレッタ・トゥーンベリさんらが乗り込んだ1隻のヨット「マデリーン」号が支援物資を積んでパレスチナ・ガザに向けて出航しました。

私はこのニュースを知り、自分の子や孫ほどの若者たちが命がけの行動に出たことに、座視できない気持ちでいっぱいになりました。

ところが、出航して数週間後にガザ沖の公海上にて不法に拿捕され、乗員全員が拉致され収監された後にイスラエルから追放されました。

しかし、このことはガザ虐殺に反対する全世界の民衆の戦いの象徴となりました。



世界中から集まった船長候補たちと

とりわけ、グレッタさんの参加によって、「パレスチナの正義を求める戦い」と「気候正義」を求める活動との交差性が可視化され、世界中で大きなうねりとなりました。

それから、3か月もたたないうちに40隻を超えるヨットが欧州中から集まり国際NGO「不屈の船団」に成長したので



シシリー島に集結したヨット

参加応募者は2万7千人を数え、選考された約500名の人道活動家たちが支援物資と共に再びガザに向かいましたが、またもや公海上にてイスラエル軍による襲撃を受け、全ての船の略奪と乗り込んだ人道支援家たちは拘束され激しい暴力と拘束をされました。

しかし、解放直後には26年春の新たな計画が発表されました。



地中海をガザに向けて航海中、
操船技術や航海術などを伝える



船長として乗り込んだヨットの帆に
アーティストが絵を描いてくれた



襲撃の瞬間・サーチライト

武本匡弘さんの講演会を再度行います。
12月20日(日) 午後3時〜5時
現代座3F小ホールです。
遠方の方は各地での予定及びオンライン日程をご覧ください。
「武本匡弘講演会
予定」で検索、またはQRコードからご覧になれます



船長としての要請

私は海洋調査のために、自ら操船するヨットで太平洋を航海するという活動をしてきましたので、経験を生かせると考え自ら参加することを決意しました。

「不屈の船団」への参加者のほとんどはヨットによる航海経験などない人たちです。

船長としての要請を受けていた私は、これこそ「自分の仕事」であるという思いを強くしました。

シシリー島から出航するチームの船長として、各国から参加している船長候補たちへ長期航海のための訓練や指導、そして初心者へのトレーニングを担当しました。

ヨットは欧州中から集められてきた中古のヨットが約40隻、それらの修理や長期航海に耐えられる補強なども自分の大事な役割です。

そして、約2か月間の準備を経て4月26日出航の日をむかえました。

国際公海上での襲撃

出航4日後の夜、以前から飛来していたドローンの数が急に増えだしました。

その直後夜8時半頃、200mほど左手にいた仲間のヨット数隻に、イスラエル軍兵士が乗る複数の高速ボートと、何かが発射され火の手が上がっている様子が確認できたのです。

私と乗員7名は、この状況を想定した訓練を行っていたため冷静に行動することが出来ました。

全速で逃走し12時間後ギリシャ領海内に避難できましたが、無抵抗の人道活動家たちに対してこの襲撃は6時間にも及び、22隻の船が襲われ173名の人道活動家たちが拉致されました。

2日後にクレタ島の港にて解放されたものの、そのうち36名が激しい暴行や拷問を受け、病院に搬送されました。

私の船はクレタ島の湾に向かい、錨を降ろし、残りのヨットとの再集結を行いました。

しかし出港日がたびたび延長されていたことで、予定していた滞在期間の限界と帰国日が迫り、この時点で下船、自分が育てた後任の船長と乗員たちにガザへの航路を託し帰国しました。

その後、ガザに向かった船団は再び公海上にて襲撃され、50隻の船、そして428名の同志たちが拉致され、暴行、そして拷問などを受け数日後に開放されました。

帰国後、多くの人たちが各地で報告会を企画してくれています。

今や「ならず者国家」となった米国とイスラエルの蛮行。そして、日本政府もそれに加担しているという数々の事実を知ってもらいたいと思います。

共に「力の支配に屈しない!」という固い意志を確認し、声をあげ続けていきましょう!

3階小ホールの幕が 新しくなりました

現代座の3階には40席の小さなホールがあります。これは2005年にみんなで作業して作った小ホールです。

それまで現代座会館の3階には会議室と音楽スタジオと客間がありました。公演や稽古をするのは地下にあるホールだけでした。

ずっと全国各地での公演を続けてきた現代座ですが、その時期、現代座会館での公演を大事にしていきたいと考え、もつと気楽にすぐ近くで芝居を楽しめる小さなホールがほしいと思ったのです。

でもお金はありません。みんなで話し合って、自分たちでスタジオと会議室の間の壁を壊してひとつの部屋に作り替えることにしました。いつも舞台のセットを作っているのだからやれるだろうと、意欲的に取りかかったのですが、やってみるとやはり大変な事でした。それでもみんなで壁を壊して、その瓦礫を袋に詰めてベランダから下に吊り降ろし、何とかひとつの部屋になりました。スタジオだった所は壁も床も防音していたので、会議室より床が高いので舞台になりました。

照明が吊れるような高さにしようと、会議室部分の天井板は取り払いました。そしてむき出しになった鉄骨はペンキ屋をやっている元劇団員に頼んで塗装してもらい、照明バトンを付けました。

そして舞台の正面や側面には緑色の幕を取り付けました。それは北海道で公演を取り組んだ実行委員会から寄付していただいた大きな幕でした。体育館での公演で会場の後ろの仕切りにずっと使っていた物です。それを必要な大きさに裁断して小ホールの幕にしたのです。

こうして小ホールが出来上がりました。それから木村快は小ホールでやる芝居をいくつも創りました。グランドピアノがありますからコンサートもやれます。バラエティや語りもやりました。小ホールは、会場全体が一体になる楽しさを実感できる場になりました。

しかし小ホールを作って20年が経ち、その前から活躍していた幕はすっかり古くなって、引っ張ると裂けるようになってしまいました。

そこで今回、「出航」公演で衣装を担当して下さった有島由生（ゆう）さんに幕作りをお願いしました。有島さんは防炎加工済みの布を用意してくださり、ミシンを持ち込んで何日もかけて幕を作ってくださいました。現代座の八木さんが新しいカーテンレールをつけて幕を吊り、有島さんがサイズを調整して再度ミシンをかけ、小ホール全体を囲む、きれいな幕が出来上がりました。

これから、この新しい幕で囲まれた小ホールを活用して、色々な活動をしていきたいと思っています。



ミシンを掛ける有島さん



幕を吊る八木さん



緑町ふれあいサロン

現代座の1階では、毎月第三木曜日の午後「緑町ふれあいサロン」が開かれています。

地域の緑町第2町会の役員有志と現代座が協力して、もう10年以上続いています。毎回10人ほどの方が集まって、それぞれのこの一ヶ月の間の出来事を話したり、気になっていることについてみんなに聞いてみたり、自由におしゃべりします。

8月20日のふれあいサロンには、近くの桜町病院リハビリテーション科の理学療法士さんが来て、「暑い季節の熱中症対策とフレイル予防」について、資料や図を見ながら分かりやすく話してくれました。みんなはいつものように元気に「知ってる、知ってる！」とか「私が聞いたのはこうだったわよ」などと自由に発言しながら聞きました。筋肉量を増やす運動も教えてもらいました。これもみんな何だかんだと自分がやっていることなどを話しながら、実際に足を動かしてみたりしました。

最後はいつもみんなで歌を歌って終わります。8月は「長崎の鐘」を歌いました。

高齢者が多いので、いつも互いの体調を気遣いながら、今月も元気で会えて良かった、と確認する貴重な時間です。



リトル・銀河「双子の星」公演

8月30日(日)の午前と午後の2回、現代座ホールで、宮沢賢治原作「双子の星」をチュンセとポウセの大冒険の公演が行われました。公演したのは「リトル・銀河」というチームで、現代座に事務所を置いている「スタジオ・ポラノ」のメンバーです。

いつもは学校などで子どもたちに見てもらっていますが、今回は子どもたちが色々な年代の人といっしょに楽しめる機会をつくりたいと、現代座ホールでの公演を企画しました。「双子の星」は夜空に輝く星座のお話です。「チュンセとポウセ」という双子の星と「カラス」と「サソリ」が出てきます。ピアノの生演奏でたくさんのお作曲を歌いながら動き回る舞台に、子どもたちは釘付けです。

会場は舞台と客席をフラットにしてごさを敷いて、小さい子どもさんも安心してお母さんといっしょに座って楽しめる「親子席」を作りました。うしろの椅子席には中学生や高齢者も。本当に色々な年代の人がいっしょに楽しみました。

公演が終わると、人形や出演者といっしょに写真を撮る時間で



す。なぜか「サソリ」さんが子どもさんには大人気。皆さんが「楽しかった!」と言って帰ってくださいました。

木村快の近況

木村快は今年2月に90歳になりました。お祝いの会の様子は、この「現代座レポート」でもお伝えし、「新しい人生の出発だ」と書きました。ところがそのあと3月末に桜の花の写真を撮ろうとして転倒。大腿骨頸部骨折で手術という事態になってしまったのです。

90歳を超えて骨折で入院では寝たきりになってしまおうのでは、と心配されました。実際最初は本人も不安でいっぱいだったようです。しかし手術が終わってからは、少しずつ元気を取り戻しました。リハビリ病院に転院してからは、1日4回のリハビリを受け、本当は3ヶ月以上の入院が必要と言われていたのですが、「どうしても退院したい」と5月末に退院しました。たばこが吸えないことがとても辛かったようです。

退院してからは、家の中ではちゃんと一人で歩きまわり、私が付き添ってではありますが、自分の足でちゃんと歩いて、家の近くを毎日散歩しています。体重がすごく減ったため体力が無くて、まだ以前のようには動けません。が、「現代座に行きたい」と口にするようになりました。

「出航」公演の時は入院中で、残念ながら公演を見ることも、皆さんにご挨拶することも出来ませんでした。本当に

にご心配をおかけしました。

近いうちに元気な姿でお会い出来るようになると思います。



(木下美智子)

現代座会館 6月～8月 活動日誌

6月1日 「川崎平右衛門顕彰会」総会参加
16日 「現代座レポート106号」発送作業
21日 現代座会議

7月2～13日 南側外壁防水塗装工事

9日 東京学芸大学で「ハンセン病語り」

19日 現代座会議

8月22日 現代座会議

26～31日 屋上防水塗装工事

第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

6月19～20日 「ながめくらしつ」公演

7月18日 武本匡弘氏「ガザ支援報告会」

25日 「青春の庭のうさぎたち」稽古

8月1～16日 劇団「アルファ」稽古

20～23日 「青春の庭のうさぎたち」公演

25～26日 「ハトノス」稽古

28～30日 リトル銀河「双子の星」公演

【三階小ホール】

6月1日 星省治さん録音

7月4日 「こころまろん」歌の練習

26日 津田「リトルコンサート」

8月13～16・29～30日 「ハトノス」稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

【二階サロン】

6月23～29日 有島由生さん・3階幕作り

7月18日 緑町第2町会役員会

8月22～23日 「青春の庭のうさぎたち」控室

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円
協賛会員 10,000円（1口以上）
正会員 10,000円

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座